

2023年ヨーロッパ病理学会参加報告

慶應義塾大学医学部病理診断部

眞杉洋平

この度、2023年9月9日から4日間にわたってダブリン（アイルランド）にて開催された第35回ヨーロッパ病理学会学術集会に派遣して頂きましたので報告をさせていただきます。ヨーロッパ病理学会に日本病理学会から現地に派遣された初めての会ということで大変光栄に存じます。

参加したセッションは、ヨーロッパ病理学会－日本病理学会 Joint Special Session: From research to pathological practice: examples of translational paths で、ヨーロッパからは2名、日本からは2名が発表しました。セッションの企画段階から4人でウェブミーティングやメールでのやりとりを重ね、テーマの設定・スピーチの順番・進行等について相談をし、当日にもスピーカーズラウンジで打ち合わせの時間を持って本番に臨みました。驚いたことに、我々のセッションは、2階席まである最も広いメインホールが割り当てられており、日本病理学会との関係性への期待が感じられました。私自身は、Heterogeneity of the pancreatic cancer microenvironment のタイトルで発表をしました。各人20分の発表の後、40分のラウンドテーブルディスカッションの時間を設けていましたが、全員の発表は予定よりスムーズに進み、AIの病理診断への応用についての質問がフロアから多く出ましたが、おそらく15分程度を残して締めた印象でした。

他のオーラルセッションも興味深いものが多く、大変勉強になる発表が幾つもありました。Computational Pathology がヨーロッパでは全盛の様子でした。全4日間のプログラム全体のボリュームは日本とそれほど変わりなく、日本病理学会総会の方がむしろ盛況な感じを受けましたが、これは毎日8:30-19:30の長丁場でセッションが終わる毎にコーヒープレイクや昼食が組み込まれているなど、とてもゆとりがあるプログラム設定になっているから、そう感じたのかもしれませんが。尚、ヨーロッパ側2名の話では、ハイブリッド開催ということで現地に來る人は少ないが、実際の参加者は北米病理学会よりも多いそうです。コーヒーや食事をとりながら、至る所でビジネスミーティングをしている様子などをみると、ヨーロッパ病理学会独特の空気を感じるとともに、ヨーロッパではコロナ禍は終わつつあることを体感しました。

最後に、このような貴重な機会を与您いただきました日本病理学会ならびにヨーロッパ病理学会の関係の方々に、深く御礼申し上げるとともに、両学会の関係がますます発展することを祈念しています。

写真：全面ガラス張りのコンベンションセンターの中からみたダブリンの街

コンベンションセンターは街の中心から少し離れた、大型建築物の多い再開発地域にありました。ダブリンを南北に分けるように流れるリフィー川に、ハーブのような形をしたサミュエル・ベケット橋が架かっている様子がみえます。日本よりかなり気温は低く、9月中旬にも関わらずセーターが必要なくらいの気温でした。

